

世界と日本の出生コホート研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 日本DOHaD研究会 公開日: 2018-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐田, 文宏 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/3233

世界と日本の出生コホート研究

○佐田文宏

中央大学保健センター

欧米では、出生コホート研究が盛んで、古くから大小様々な出生コホート研究が行われてきた。また、欧州では古くから登録システムが制度化され、大規模な疫学調査が行いやすい環境にあり、長期間の追跡調査を継続することも比較的容易であった。古くは、Hertfordshire Cohort Study (HCS) は 1931 年に、Helsinki Birth Cohort Study (HBCS) は 1934 年に開始され、得られた成果から Barker 仮説が立てられ、検証された。戦後では、1946 年に開始された英国の出生コホート研究 (1946 National Birth Cohort) は、現在まで追跡調査を継続してきたことで、生涯 (Lifetime) 研究として注目された。近年、出生コホート研究は、ネットワークを構築し、研究領域毎あるいは研究手法毎にコンソーシアムを立ち上げ、統合評価が行われている。出生コホートのネットワーク Birthcohort.net には、1980 年以降に開始された母児 300 組以上の規模の欧州を中心に約 70 の出生コホート研究が登録され、収集されたデータと生体試料に関する情報が、採取時期とともにデータベースに提供されている。Birthcohorts.net を基盤とした化学物質の環境リスク評価に特化したプロジェクトである Environmental Health Risks in European Birth Cohorts (ENRIECO) は、ヨーロッパを基盤とする。一方、Birth Cohort Consortium of Asia (BiCCA) は、日本、中国、韓国、台湾を中心に東アジアの 22 出生コホートが参加し、子どもの環境と健康に特化したコンソーシアムである。近年、出生コホート研究においても、ゲノムワイド関連研究 (GWAS) に特化したコンソーシアム Early Growth Genetics (EGG) Consortium 及び EARly Genetics and Lifecourse Epidemiology (EAGLE) Consortium が構築され、ライフコース疫学の視点に立ち、様々なアウトカムのリスク評価が行われている。わが国では、欧米諸国に比べ、このようなコンソーシアムによる連携は立ち遅れている。今後、DOHaD を基盤とする先制医療に関する学際的な国家的規模のプロジェクトの計画立案と中枢研究機関の設置の実現を期待したい。

【略歴】

- 1986 年 京都大学医学部卒業
1989 年 東京大学医学部助手 (公衆衛生学)
2000 年 北海道大学大学院医学研究科講師 (公衆衛生学)
2003 年 北海道大学大学院医学研究科助教授 (同)
2007 年 北海道大学大学院医学研究科准教授 (同)
2008 年 国立保健医療科学院疫学部室長
2011 年 国立保健医療科学院生活環境研究部上席主任研究官
2014 年 東京医科歯科大学難治疾患研究所非常勤講師・法務技官
2016 年 中央大学保健センター医療管理者・産業医
北海道大学客員教授

【演者・共同演者全員と所属の英語表記】

Fumihito Sata
Health Center, Chuo University